

島崎藤村の番号の付いた詩とその構成

—この形式の詩の流れと内容—

橋 口 晋 作

島崎藤村の第三詩集『夏草』には、一、二という番号の付いた詩から成る詩が「月光五首」、「新潮」、「天の河二首」、「婚姻の祝の歌」と四篇出現し、第四詩文集『落梅集』にもこの形式の詩が「労働雑詠」、「壯年の歌」、「胸より胸に」、「問答の歌」と四篇ある。そして、大正六年九月の改刷版『藤村詩集』になると、「問答の歌」などが収載されず、「胸より胸に」の番号が省かれたが、新たに『若菜集』部分に「小詩二首」、「春」、「合唱」と番号の付いた詩群が出現して来る。本稿では、この形式の推移について具体的に考察し、合わせて、『夏草』・『落梅集』中のこの形式の詩の構成についても考察するものである。

番号の付いた詩の発生と展開

『夏草』以前の第一詩集『若菜集』、第二詩文集『一葉舟』には、一、二という番号の付いた詩はない。しかし、この二詩(文)集の初出誌『文學界』を見ると、明治二十九年十月発行の四十六号の「一葉舟」詩群に既に番号の付いた詩が出ている。それは、この詩群の中の「こひぐさ」小詩群である。次にそれを記してみよう。

- | | | | |
|----|------|----|-------|
| 其一 | 初戀 | 其二 | 狐のわざ |
| 其三 | 強敵 | 其四 | 東西南北 |
| 其五 | 四つの袖 | 其六 | いきわかれ |

島崎藤村の番号の付いた詩とその構成(橋口)

- | | | | |
|----|-----|----|-----|
| 其七 | 蓮花舟 | 其八 | 逃げ水 |
| 其九 | 月光 | | |

右の九篇の詩は、「其一 初戀」が恋の始まりを主題にした詩で、残り八篇は恋の様々な様相を詠じている詩となっているが、その中の「其四 東西南北」は恋の場における男心・女心を一般的に詠ったもので、やや異質な内容となっている。この「其四 東西南北」以外の詩を細かに見て行くと、「其二 狐のわざ」は「吾心」の世界を軽やかに描いたものであり、これが「其一 初戀」の次に置かれたのは自然といえよう。この「其二 狐のわざ」と対照的な世界となっているのは、行動の高まりを描いている「其五 四つの袖」である。また、「其六 いきわかれ」、「其七 蓮花舟」は、「人妻をしたへる男」、「尼をしたへる僧」といった道ならぬ恋の世界である。この間の「其三 強敵」は恋の三角関係を寓意したもので、「其六 いきわかれ」に通じるものがある。終わりの「其八 逃げ水」と「其九 月光」は、「なつかしき君と てをたづさへ くらき冥府までも かけりゆかん」という「われ」と「なさはは説くとも なさけをしらぬ」という対照的な「われ」の世界となっている。このように「こひぐさ」小詩群は、その題のとおり恋の始まりを冒頭に、恋の様々な様相を詠じた一群となっていたのである。^(注一)しかし、藤村は、『若菜集』を編集する時、この小詩群の姿を壊し、九篇の詩は、採用されなかったもの(一篇)、前半部の雑に配されたもの(一篇)、後半部の十月の詩の中に置かれたもの(三篇)、男性の「秋の思」を描いたところに配されたもの(四篇)とばらばらにされてしまった。^(注二)

『一葉舟』所収詩発表時代の明治三十年八月の『新著月刊』に、「こひぐさ」小詩群のものと同題の「四つの袖」が発表されている。この詩には、序文があつて、詩は一連四行、一行十二音を基本としな

がら、途中二カ所七音交互の連（六連と四連）が出て来るという形式になっている。そして、この詩には、音数の異同を問わず、各連に番号が付けられている。このような形式は、他に例がなく、この詩の新機軸だったかと考えられる。しかし、この詩は、『一葉舟』にも、その後の詩（文）集にも収められることはなかった。^(注三)

『夏草』には、冒頭に記したように四篇の番号の付いた詩がある。

「月光五首」は、序詩と五篇の詩から成っている。どの詩も、一行の音数は十二である。序詩は、一連四行の五連で成っている。「其一」は、第一、二連は各十行、第三連は三行、第四連は十四行と、連の行数の変化する詩となっている。「其二」・「其三」・「其四」の三詩は、序詩と同じく一連四行であるが、「其二」は九連、「其三」は七連、「其四」は五連と、それぞれに連数が異なる。「其五」は、一連六行の四連から成っている。この詩については、早く、笹淵友一氏に、

「月光五首」は月光の下における自然と人事の諸相——幽林、池面、笛の音、安息といふ具合にさまざまなシチュエーションを設定してそれぞれ幽邃、静寂、爽涼等の情調を表現しようと企てた聯作という指摘があった。^(注四) 笹淵氏の特に説明していない「其五」は、月の様子、印象を各連に二つずつ挙げて行って、その多様さを詠じたものとなっている。序詩は、『若菜集』では、集の冒頭（初出では「うた、ね」詩群の序詩）と「天馬」についていたが、読者への挨拶となつている点で、『若菜集』冒頭の序詩に近いと言えよう。

五篇の詩は、時間の流れに特に関係なく、月（光）の様々な姿を描いたもので、前記「こひぐさ」小詩群の発展したものと見ることが出来る。

「新潮」は「一」と「二」から成っている。この詩も、一連の音数

は十二である。また、「一」、「二」とも一連は基本的に六行から成っている。基本的にとことわったのは、「二」の第十五連のみは倍の十二行となっているからである。「一」は十連、「二」は十七連と連数が異なる。この詩についても、笹淵氏に『鶯の歌』と同工異曲の「物語詩」という指摘があった。「一」は、「日没時の海原を時刻の推移を追ひながら描いたもので、「二」は、「嵐のために櫓を失つた兄が海の藻屑と消えうせた後、悲歎の中に一時自失してゐた弟は再び『もろく果つべき命かは』と運命への確信を取り戻して闇黒の海原を新潮に乗つて帰らうとする」までを描いたものである。^(注五) 従つて、この詩の「一」・「二」は場面の变化（時間がたつての）を示したものと見るべきであろう。『夏草』には、劇詩「農夫」が収められているが、このような使い方は、その場面構成などに関係して生まれたものに違いない。

『夏草』の番号の付いた詩の残り二篇「天の河二首」・「婚姻の祝の歌」の「一」・「二」も右の「新潮」と同じ働きと見ることが出来る。「天の河二首」の「其一」は一連六行、一行十二音の八連から成る詩であるが、「七月六日の夕」という見出しが付いている。「其二」は一連十二行、一行は基本的に十二音であるが、第四行は「今し〇〇らし」、第九行は「かしこにかしこに」のそれぞれ繰り返し（共に五字下げ）、第十行は七音（七字下げ）の三連から成っている。「其一」は七夕前夜の天の川、「其二」は当夜（七夕）のそれと、背後に時の流れが認められる。

「婚姻の祝の歌」も、「其一」には「花よめを迎ふるのうた」という見出しがあり、「其二」には「さかもりのうた」という見出しが付いているので、進行してゆく結婚式の場面をそれぞれに切り取つたものであることは明白である。「其一」、「其二」とも一連四行、一行十二音であるが、「其一」は八連、「其二」は十四連より成っている。

『落梅集』にも、冒頭に記したように四篇の番号の付いた詩がある。様々な姿を並列的に描いた詩の方から見て行こう。二篇ある。

「壯年の歌」は、序詩と六篇の詩から成っている。どの詩も、一行十二音、基本的に一連四行である。基本的に二とことわったのは、「其三 佯狂」が二連毎に二行から成る短い連を挟み、序詩は逆に十八行となっているからである。序詩は長い連一連のみである。「其四 草枕」が二連、「其五 埋木」が三連、「其六 邂逅」が六連、「其七 告別」が八連、「其八 幻境」が十二連、「其九 佯狂」が短い連も入れて同じく十二連となっている。この詩は、明治三十三年三月の『新小説』に発表されたもので、その時の総題は「壯年」であった。各詩の見出しなどに異同はない。但し、序詩は、「わかもの」と「ある翁」の九行ずつの間答から成る二連、「其三 佯狂」の二行から成る連は二行の後に「さのさのさのさのさのさのさのさのさのさのさのさのさ」という三行からなる囃子詞が付いていたという異同がある。この作品については、笹淵氏の「バイロンの浪漫的情熱」に「発想を刺戟」された「一人の主人公によつて貫かれた叙事詩的作品」という見方もあるが、^(注六) 剣持武彦氏の、

壯年のさまざまな生き方の種々相を、藤村の内面の分身としてひとつひとつ独立させ、ちようど『若菜集』に収められた六人の乙女の歌が、藤村の青春体験の回想の分身として造形されたように全体として一連の構成をなしたものではなからうか。「其五 埋木」は隠遁の生涯を送ろうとするもの、「其六 告別」は故郷を去つてゆくもの、「其七 佯狂」は夢の浮世と浮かれて生きようとするもの、「其八」は漂泊に身をおくもの、「其九」は恋と芸術に生きた過去を回想するもの、「其十」は新生を思うもの。一として人生の道半ばにおける藤村の内面の分身ならざるはない。

島崎藤村の番号の付いた詩とその構成（橋口）

という捉え方^(注七)の方が分かりやすい。改刷版『藤村詩集』では序詩は収載されなかった。

「胸より胸に」は六篇の詩から成っている。「壯年の歌」と同様にどの詩も、一連四行、一行十二音である。「其四 吾戀は 河邊に生ひて」は二連、「其五 めぐり逢ふ 君やいくたび」は四連、「其六 あゝさなり 君のごとくに」・「其七 思より 思をたどり」・「其八 君こそは 遠音に響く」の三篇が五連、「其九 吾胸の 底のこゝには」が六連となっている。この詩は、「壯年の歌」の二ヶ月後の五月の『新小説』に同題で発表された時は、「其五 めぐり逢ふ君やいくたび」の前に、『落梅集』の「罪」が「其五 罪なれば物のあはれを」として入っていた。そのため、「其五 めぐり逢ふ 君やいくたび」が「其六」となり、以下一つずつ番号がずれていた。この詩は、藤村が東京音楽学校ピアノ科で師事した橋糸重への感情に基づくようであるが、『島崎藤村事典』に、

これらは一群の恋愛詩で、別れ住む意中の人を遠く離れて思うさまさまざまな心情をうたったもの、その間、作者が昔から愛読した西洋古典、特にダンテの「神曲」の「地獄編」やミルトンの「失楽園」などから学んだ比喻形容がおびただしくちりばめられ、時と

^(注八) しては聖書や讚美歌の余響も聞かれる。とあるのに従うべきであろう。改刷版『藤村詩集』では、「落梅集」の「二 胸より胸に」の始めに、番号を外して、この順のまま置かれている。

推移する時間に沿って場面を切り取ったという用法の方のものに「労働雑詠」がある。これは、「其十一 朝」、「其十二 晝」、「其十三 暮」となっていて、一日から三つの場面を切り取ったものである。「其十四 朝」と「其十五 晝」は、共に一連四行、一行十二音の二連に

一連四行、一連の繰り返しの付いたもの四つで出来ている(各十二連)。「其三 暮」は四十六行(一行の音数が異なる)一連の詩である。この詩は、明治三十二年十一月の『新小説』に発表されたものであるが、初出との異同はない。内容については、『島崎藤村事典』に、

日常の生活(この場合では「労働」)を、戦闘と観、その中に生きるよろこび・生き甲斐を感じ、すべてに積極的態度を以て臨むことを強調したもので、普通いわれる享楽主義ではないが、利那の充実を理想とする生き方を謳歌したものと解してよからう。

とある。^(注九)しかし、このような切り取り方なら、同様の「朝」・「暮」の二つの詩から成る『若菜集』の「二つの聲」との違いは説明し難い。「其一」「其二」を加えて、目先を変えたといったところであろうか。

「問答の歌」は、「少年のためによめるうた二首」という説明が付いているように、『今世少年』に発表した同じ傾向の詩を纏めたものである。「其二」は明治三十三年六月の一号に発表したもので、表題は「唐がらしの歌」となっていた。表題以外に異同はない。「其二」は同月の二号に発表されたもので、その時の表題は「籠の駒鳥」である。一連四行、六連から成る詩であるが、初出では各連、第二行一字下げ、第三行二字下げ、第四行三字下げとなっていた。改刷版『藤村詩集』には「問答の歌」は収載されなかった。

『落梅集』では以上であるが、初出では、明治三十三年六月の『新小説』に発表された「海草」詩群が、

- | | | | |
|----|-------|----|------|
| 其一 | 蟹の歌 | 其二 | 椰子の實 |
| 其三 | 蟹のなげき | 其四 | 浦島 |
| 其五 | 舟路 | | |

のように番号の付いた五篇の詩から成っていた。総題の「海草」につ

いては「こんぶやわかめのような『海草』の意味であると同時に、海を題材とした詩群という意味をも含んでいる。」という説明がある。^(注一〇)「其一 蟹の歌」は寓意的な作品、「其二 椰子の實」には象徴的な味わいがある。「其三 蟹のなげき」は見送る男の「なげき」が主題となっており、「其五 舟路」は「水彩画あるいは洋画ふうのイメージの詩」^(注一一)である。「其四 浦島」は「其三 蟹のなげき」と同じく恋愛詩であるが、女性の動きが逆方向になっている。藤村は、『落梅集』を編集する時、「こひぐさ」小詩群と同様に、この詩群の纏まりを壊し、「蟹のなげき」と「浦島」は「胸より胸に」の次にこの順に配した。「椰子の實」は散文「利根川だより」の次に置かれ、「海邊の曲」を挟んでその後に「蟹の歌」と「舟路」がこの順で配された。

改刷版『藤村詩集』では、冒頭に記したように、新たに三篇の番号の付いた詩が出現した。

「小詩二首」は、『若菜集』の「逃げ水」と「月光」とを、題を省いて単に「一」・「二」として纏めたものである。先に記したように「逃げ水」と「月光」とは、もともと「こひぐさ」小詩群中の作品であった。「逃げ水」は八六調で『新撰讚美歌』第四(植村正久訳)のパロディー^(注一二)、「月光」は「讚美歌まがいの八七調」で、特に調子が近いので纏めたものであろう。

「春」は、次のような構成になっている。

- | | | | |
|---|-------|---|-------|
| 一 | 誰か思はむ | 二 | あけぼの |
| 三 | 春は来ぬ | 四 | 眠れる春よ |
| 五 | うてや鼓 | | |

それぞれの詩の『若菜集』での題は、「一 誰か思はむ」は「春の歌」、「二 あけぼの」は「新曉」、「三 春は来ぬ」は「春の歌」、「四 眠れる春よ」は「佐保姫」、「五 うてや鼓」は「春の曲」である。

『若菜集』では、「一 あけぼの」と「三 春は来ぬ」との間に「若水」が入っていたが、この順で並んでいた。従って、この「春」詩群は『若菜集』の春の詩が集まっていたところを、一層純化して連作の形にしたものと言えよう。^{注三}

「合唱」は、『若菜集』の前半部の結びとなっていた「うた、ね」詩群の詩に別の総題と「一 暗香」のように番号とを付けたものである。新たな総題の「合唱」は、姉と妹との対話という形式に因んだもので、他の総題とは質を異にするように思われる。^{注四}

なお、改刷版『藤村詩集』は、『一葉舟』所収詩を「夏草」に収め、『若菜集』・「夏草」・「落梅集」の三詩集に整理している。そして、その各詩集の詩が左のように大きく分類されているのである。

若菜集

- 一 秋の思
- 二 六人の處女
- 三 生のあけぼの
- 四 深林の逍遙、其他

夏草

- 一 春やいづこに
- 二 新潮
- 三 農夫

落梅集

- 一 千曲川旅情の歌
- 二 胸より胸に
- 三 壯年
- 四 椰子の實、其他

「夏草」の「三 農夫」のように一篇で一章をなしていたり、「其他」という便宜的な項が入っていたりする章もあるが、これらの章は、基本的には詩群（共通するところをもっているもの）となっている。そして、番号は、発表の順序に沿いながら、作品世界の違いを示すものとなっているといえようか。番号は、このように詩を整理するものとして改刷版『藤村詩集』では使われるに至ったのである。

番号の付いた詩の構成

本稿で取り上げて来た『夏草』・『落梅集』期の番号の付いた詩について、その構成を考察して行きたい。ここでいう構成は、筆者の他の稿^{注五}と同じく、連を単位とする構成である。従って、二連以下の詩については、殆ど言及しないことを、予めことわって置く。

「月光五首」の序詩は、前四連と最後の二連とに分けられる。前四連は、各連「……（逆説を示す語）……ばいかにせむ」という型を持ち、読者「君」の共鳴へ強い期待を滲ませている。最後の二連は、「君」はそのまま眠っていてよいと、前四連の読者に寄り掛かった表現をうち消している。

「其二」の第一連は、雨後月光の差し入る林を描いていて、その序ということになるか。残り三連は、明暗（「視覚」）を軸に林をとらえている第二連と聴覚で捉えたものが中心になっている第三、四連とに分けられる。短い第三連では「子規」の声、長い第四連では谷川の水音を取り上げられている。

「其二」では、月下の池の様子を描いた第一、二連が序ということになる。残り七連は、三つの部分に分けられる。最初は、この池に芸術の永遠性を見る第三、四、五連の三連である。次は、この芸術に對して、短命な人間の創造力（情熱）のことを詠じた第六、七、八連の三連である。最後は、具象的に詩人の姿を描き出している第九連一連ということになる。

「其三」は、二連ずつの三つと最後の二連の四つに分けられる。第一、二連では「はるけき西の國ぶりの 君吹きすさぶ一ふし」をもう一度吹いて欲しいと言っているが、最後の第七連では、その通りに笛の音が聞こえるという情景なので、この二つの部分が全体の枠を作っていると考える。この間の第三、四連は、「君はいかなるたくみもて

かく新しき聲を吹く」のかと問い、第五、六連は、昔の楽譜は古くなってしまうので、「一ふし新しき 君がしらべ」を聞きたいのだと言っている。

「其二・其三」は、芸術(家)に関わる内容となっている。

「其四」も、「其三」と同じように二連ずつの二つと最後の二連に分けられる。この詩は、時の流れを追って展開していると見られる。第一、二連は、「夏の日の 長きつとめ」が終わった直後である。第三、四連は、自然に涼しい秋の「樂しき園にかはりゆく 夕暮さま」が描かれている。最後の第五連は、「君」も「われ」も、月の光に誘われて彷徨い出るといふことになっている。「労働雑詠」の「其三 暮」を先取りしたような内容である。

「其五」四連は、各連が並んで連なっていると見るべきであろう。

「新潮」の「二」は三つの部分に分けることが出来る。最初は第一連から第三連までで、兄弟が漁に出たところである。次は、夕日の落ちる方に「鵲隼」の飛んで行くのを見る第四連から第七連までである。最後は、日が暮れて、星の出た海の上で漁をする第八連以下の三連である。

「二」は、四つの部分に分けられる。最初は、海の様子が一変したことを述べた最初の四連である。次は、嵐と戦ううちに兄が波に浚われてしまう第五連から第八連までの四連である。三番目は、弟が茫然として悲嘆に暮れている第九連から第十三連までの五連である。最後は、弟が気を取り直す第十四連から後の四連である。弟が気を取り直すところは、笹淵氏の指摘(注一六)のように「農夫」「下のまき」の終結部「三 鍛冶の家のとりにて」(注一六)辺りに通じるものがある。

「天の河二首」の「其一 七月六日の夕」は、三つの部分に分ける

ことが出来る。最初は、明日は七夕という思いで夜空を眺めた冒頭の二連で、序といった感じである。第二部は、作者が想像する天の川の世界である。ここは、天の川付近に心を馳せた第二、三連と、彦星の行動を思いやった第四連から第七連までの二つに更に分けられよう。最後は第八連で、これは、「其一 七月六日の夕」の纏めといった内容になっている。

「其二 七夕」三連は、各連の四行目が、「今しこぐらし」、「今し逢ふらし」、「今し飲むらし」となっているので、時間を追って二星の逢瀬を想像したものになっている。

「婚姻の祝の歌」の「其一 花よめを迎ふるのうた」は、花嫁の一行が見えたところで、大きく前後四連ずつの二つに分けられる。前四連は、更に、花嫁を迎える準備が整って、門口で待つという始まりの二連と、星と風と道中の助力を頼む第三、四連の二連からなっている。後の四連は、花嫁の美しさを称えた第五連から第七連までの三連と、「其二 さかもりのうた」の宴席への繋ぎとなっている最後の二連に分けられる。

「其二 さかもりのうた」は、大きく三つの部分から成っている。最初は、祝いの宴席の目出度さを述べた第一、二連である。これに対応するのが最後の二連である。この二つの部分が全体の枠を作っている。そして、これに挟まれた十連は、更に、花嫁・花婿の美しさを称えた第三連から第八連までの六連と二人の愛に強く結ばれた姿を称える第九連から第十二連までの四連に分けられよう。

「壯年の歌」の序詩と「其三 佯狂」は、拙稿「島崎藤村の対話・劇等の形式の詩の構成と内容―『若菜集』以後の詩について―」(注一七)で取り上げたので、それに譲って、本稿では改めて取り上げることとはし

ない。また、「其四 草枕」は二連で、特に構成を云々するような作品でもないの、これも省略する。

「其一 埋木」は、前の連を受けて展開して行く。即ち、第二連は、第一連の「朽ちはつべしとかねてしる」を踏まえた内容となっている。第三連は、第二連に出て来た「牛飼ふ野邊」に基づく世界である。

「其二 告別」は、三つの部分に分けることが出来る。第一の部分、故郷を何回も振り返りながら、「罪人」の思いを抱いて都へ旅立とうとする最初の三連である。次は、父と子の考えの断絶を語る第四連から第六連までの三連である。最後は、父を振り捨て、自分の思いに任せて旅立つ決意が記される第七連からの二連である。

「其五 幻境」は、起承転結という展開になっている。最初の部分は、五年間の夢が覚めて、「吾春」の過ぎたことに驚く第一、二連で、起ということになるのか。次は、この五年間芸術への恋に真っ黒になつてたことを述べた第三連から第六連までの四連で、承に当たろう。次は、恋が冷め、自分の芸術も色褪せてしまったことを嘆く第七連から第十連までの四連で、転ということになる。最後は、「吾身は夢ばかり」という嘆きを記した残りの二連で、結になる。起結が二連、承転が四連と連数が異なる。

「其六 邂逅」は、各連の第一行と第四行が、それぞれ「縫ひかへせ縫ひかへせ」、「濯げよさらば嘆かずもがな」の繰り返しとなっている。従つて、同じことを表現を変えて言っている風だが、名詞が強く響いている最初の三連、文になっている第四、五連の二連、ずばり「とく新しき世に歸れ」と言い切っている第六連の一連に分けることが出来ようか。

「胸より胸に」の「其一 めぐり逢ふ 君やいくたび」の構成については、既に「第一連あけぼののけはい、第二連朝風が吹き渡り、第

三連、紅の雲を望み、第四連で朝日が輝き出る、まさに大空には光あふれる。」という説明がある。^(注)時間を追つた展開ということになる。 「其二 あ、さなり 君のごとくに」は、最初の二連で述べたことを、第二連以下の四連で詳しく説明するという二段構成になっていると考える。第一部、最初の連では、「君」の他に「われ」の憩う所はないといつて、再び受け入れてくれるよう懇願している。これに対して、第二部は、第二連の「ひとたびは君を見棄てて 世に迷ふ羊なりき」から始まつて第五連の「君」の許の他住むところはないという懇願に至るまでを体験を交えて述べている。なお、この体験を語る第三、四連は、「樂しきは」、「悲しきは」で始まる対句となっている。

「其三 思より 思をたどり」は三つの部分に分けられる。最初は、第一連で、ここは、全体の序と見られる。次は、第二、三連で、ここでは朧な月に親しさのようなものを感じている。これに対して、第四、五連では、その朧なところに捉えがたさのようなものを感じていて、前二連とは味わいを異にしている。

「其五 吾胸の 底のこゝには」も、三つの部分に分けることが出来る。最初は、やはり第一連であるが、これは、主題のようなものをズバリと言つてのけたという風になっている。次は第二連から第五連で、ここはそのことを別な形で表現したところと見ることが出来る。

この前半三連は、「もしやわれ〇にありせば」で始まり「……ましものを」で終わる仮定法を取つて、第五連は、それを受けて、「朝「床は濡れてたゞよふ」ほどこだと言っている。最後の第六連は、しかし、その「秘密」は「たゞ熱き胸より胸の 琴にこそ傳」える他ないと結ぶのである。第一部、第三部がそれぞれ一連で、釣り合いは取れているようだ。

「其六 君こそは 遠音に響く」は、前記「四つの袖」（明治三〇年八月『新著月刊』）の縮刷版のような印象がある。これも、三つの部

分に分けることが出来る。第一部は、冒頭からの三連で、「われ」が盲目のような感じで「君」を探していると記される。第二部の第四連では、独り身から抜け出すために体も心も乱して「君」を求めていると述べられるが、説明不足のような印象は否めない。第三部の第五連になると、もっと飛躍があつて、「戀の暗には 君もまた同じ盲目」ということが示されている。このような飛躍の多さ、連数の不均衡から、筆者には、「四つの袖」の縮刷版かと思われるのである。

最後に、初出の『新小説』の「胸より胸に」の「其一 罪なれば物のあはれを」となっていた「罪」にも触れて置きたい。この詩も、他の詩と同様に一連四行、一行十二音である。この詩の冒頭からの三連は、各連「罪なれば・・・なり」二回の繰り返しから成っている。そして、最後の第四連は、冒頭に「罪なれば」があるだけで、前三連とは形を異にしている。内容は、道に反する恋に落ちて、地獄をも厭わぬ心中行を辿って行くという流れになっている。

「勞働雜詠」と「問答の歌」も、「島崎藤村の対話・劇等の形式の詩の構成と内容―『若菜集』以後の詩について―」で取り上げたので、省略する。

最後に、『新小説』の「海草」詩群に触れて、この章を終えたい。

「其一 蟹の歌」については、「この詩は『序、破、急』の三段仕立てになつている。」という捉え方があるが、筆者は、第一、二連の構成が似ていることから、ここと第三連の二部構成と考えたい。前半の平穏な生活が一変してしまふ様を、寓意的に描いた作品ではあるまいか。

「其二 椰子の實」は、三つの部分に分けられるように見える。最初は第一連で、ここは事実を淡々と記したところである。次は、第二

連から第四連までの三連で、「われ」が椰子の実に話しかけているところである。最後は、第五連以下の三連で、その実を胸に当てたところ、流離の思いが溢れて来たことを述べている。

「其三 蟹のなげき」は、二連ずつの三部構成になつている。三部の展開は、前の「其二 椰子の實」に似ていのではないか。第一部は、「君」の航海の無事を祈ることが記されていて、序のようなものである。第二部は、「われ」の心の内での語りかけ（心内語）となっている。第三部は、海を隔ててしまう「君」への未練の情が記される。「其四 浦島」も三つの部分に分けられる。第一部は、最初の二連で、ここは場面を描いたところである。第二部は第三連の一連で、「浦島」が「わだつみの神のむすめ 乙姫」に問いかけたところである。第三部は残りの二連で、「乙姫」の返事である。よく知られた伝説とは、全く違う内容になつている。

「其五 舟路」も三つに分けられようか。最初は、大らかに船旅の気分を詠じた第一連である。次は、第二、三連で、ここでは海の中に関心が向いている。最後は残りの二連で、ここでは視線が遠くに向いている。三つに分けられるとはいっても、なだらかに続いているという感じである。

結びにかえて

本稿で取り上げた番号の付いた詩を分類すると、次のようになる。

イ 同一の題材を扱った作品であることを示したもの

「月光五首」・「壯年の歌」・「胸より胸に」・「春」・「小詩二首」

(「いひぐさ」小詩群・「海草」詩群)

ロ 場面などの違いを示したもの

「新潮」・「天の河二首」・「婚姻の祝の歌」・「勞働雜詠」・「合唱」

ハ 便宜的なもの

「問答の歌」(「こひぐさ」小詩群・「海草」詩群)

イの五篇を詩集で分けて、その印象を記すと、『若菜集』のものは青春のものであり、『夏草』のものは文学上の苦勞を物語っているようであり、『落梅集』のものは壮年のものだということである。『夏草』は『若菜集』の一年四ヶ月後、『落梅集』は四年後である。『落梅集』に至ると、壮年の現実に即した詩を詠もうとしているように見える。

口の代表的な作品といえば、「新潮」と「労働雑詠」になろう。いずれも、肉体労働が材料となっていて、やはり『若菜集』の世界とは異なる。

「○○草」という題名の詩は、イとハの両方にあげることになったが、イ的でありながら、経過を見ると、便宜的なものだったのかという気になる。番号の付いた詩が『夏草』から出現するのは、この詩集そのものが「○○草」となっているように、便宜的な性格をもっていたからであろうか。

構成については、番号の付いた詩それぞれが同じ形に陥らないように精一杯の工夫が施されていて、藤村の努力は、この面にかなり費やされたように見える。

(注一)「こひぐさ」小詩群の詩の構成については、拙稿「島崎藤村の詩の工夫―構成を中心に―」(『人文』平成一六年八月)に記した。

(注二)このことについては、拙稿「初版『若菜集』の構成とその世界」(『近代文学論集』平成一六年十一月)に記した。

(注三)「四つの袖」の構成については、「島崎藤村の詩の工夫(承前)―構成を中心に―」(『人文』平成一七年八月)に記した。

島崎藤村の番号の付いた詩とその構成(橋口)

(注四)『文學界』とその時代下(昭和三五年一月)の第七章第十節「夏草―藤村詩集 その三―」から。

(注五) (注四)に同じ。

(注六) (注四)の著書の第十一節「落梅集―藤村詩集 その四―」から。

(注七) 日本近代文学大系15『藤村詩集』(昭和四六年一二月)の「落梅集」の補注から。

(注八) 同書(昭和四七年一〇月)の「胸より胸に」の項(矢野峰人氏執筆)から。

(注九) (注八)に同じ。但し、「労働雑詠」の項。

(注一〇)・(注一一) (注七)に同じ。

(注一二) (注七)の著書の「若菜集」(関 良一氏担当)の頭注から。

(注一三)「春」の詩の構成については、(注三)の拙稿に記した。

(注一四)「合唱」の詩の構成については、拙稿「島崎藤村の対話・劇等の形式の詩の構成と内容―『若菜集』以後の詩について―」(『鹿児島県立短期大学紀要 人文・社会科学篇』平成一六年一二月)に記した。

(注一五) (注一)・(注三)・(注一四)の拙稿。

(注一六) (注四)に同じ。なお、笹淵氏の「新潮」についての考察は、多方面に渡っていて詳しい。

(注一七) (注一四)の拙稿。

(注一八)・(注一九) (注七)の著書の頭注から。

(二〇〇五年九月三十日 受理)